東洋大学
ボランティア支援室

創立：1887年
学生数31,339名（2017年5月1日現在）
白山キャンパス・赤羽台キャンパス・
朝霞キャンパス・川越キャンパス・板倉キャンパス

東京都文京区本駒込1-10-2　東洋大学白山キャンパス甫水会館1F
TEL：03-3945-7927
mlvolsup@toyo.jp
https://www.toyo.ac.jp/site/csc/316315.html

設立のあゆみ

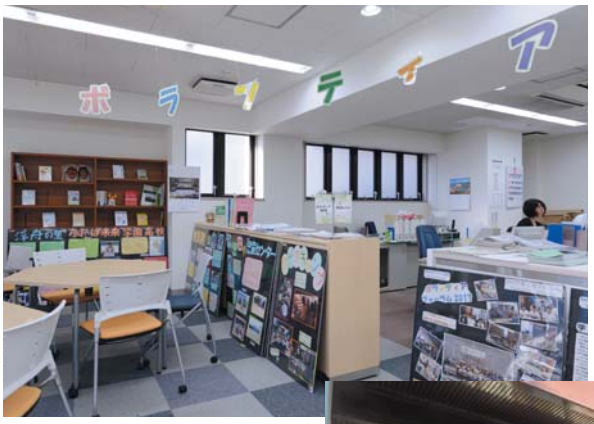
2005	2004年に発生した新潟県中越地震の災害ボランティアで、山古志村（当時）に学生・教職員を派遣
2011	東日本大震災における支援活動（学生・教職員の派遣など）
2016	熊本地震における支援活動（学生・教職員の派遣など）
	社会貢献センター内に準備室を設置
2017.04	ボランティア支援室　設立

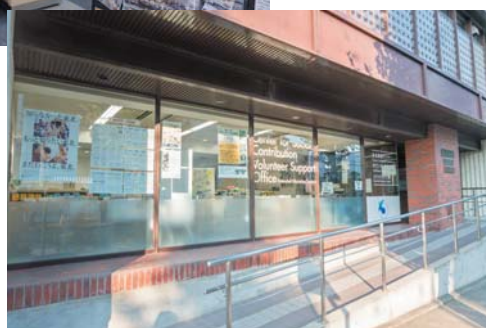
ボランティア支援室のミッション

東洋大学は、社会貢献を教育理念の柱の一つとし、「主体的に社会の課題に取り組む」人材の育成を行ってきました。そして、これからの大学は、地域社会から信頼を受け支援されることが必要です。そのためには、積極的な社会貢献を進めることが期待されています。それは、地域社会のためであると同時に、大学自身のためでもあると言えます。

東洋大学は、3万人超の学生を擁する総合大学であり、大学に蓄積された人的・知的資源を供出し、これらを必要としている地域に支援を届ける一つの方法が、学生によるボランティア活動です。

こうした中、東洋大学は、今後も地域社会から信頼され、地域社会との交流や支援を深化していくことを目的に、2017年4月、東洋大学ボランティア支援室を設立しました。





年間活動状況

2017.04	ボランティア支援室開設
05	ボランティアカフェ開催
07	オープニングイベント「ボランティアフォーラム 2017」開催
11	ボランティア・社会体験スタディツアー開催
12	「ボランティア体験会 2017 WINTER」開催

■東洋大学ボランティア支援室とは

学生の学びへの支援と同時に、ボランティア活動を通じて、大学が地域社会の一員としての責任を果たしていくことを念頭に活動を行います。

ボランティア支援室長
社会学部 社会福祉学科 教授
森田 明美氏

STEP1

設立のねらい

ボランティア活動を一元的に把握・発信する組織

東洋大学では、従来から様々なボランティア活動が積極的に展開されてきました。学生ボランティアセンターという学生団体があります。この団体は学生部所管の学生サークルで、新潟県中越地震の災害支援の際に立ち上がりました。「外部から大学に学生のボランティアを募りたいという話があると、この団体につなぎます。ある意味大学側と一定の関係があるといえる団体で、規模も数百名の学生が所属しています。他にもボランティアサークルは約30あります」とボランティア支援室長の森田明美氏は話します。また、学内の各教員も自分の専門分野に関連して、教育・研究・社会貢献の一環としてボランティア活動を行ってきました。

「しかし、これらの様々なボランティア活動を一元的に把握する部署がなく、外部から見ても、学生から見ても、大学の取組が見えにくい状況がありました」と森田氏は話します。そのため、ボランティア支援室が開設されることで、外部からも募集依頼の窓口が明確になり、様々なボランティア活動を学生に紹介でき、学生にとっても、ボランティアを募集したい方にとっても、間口が広がり、東洋大学におけるボランティア活動の積極的取組を発信し、一層の充実が図られることになりました。

初年度は白山キャンパスを中心に、ボランティア活動を希望する学生への窓口対応、学生にボランティアとして協力依頼をする外部の団体の申込み及び相談対応を行い、適切な場所に学生を送り出していきます。実際にボランティア現場に出て行く学生の安全確保のためには、大学としても受入から、準備、実施中の相談、とりわけ危機管理体制の構築を含む多様なバックアップを行う組織が不可欠だったのです。

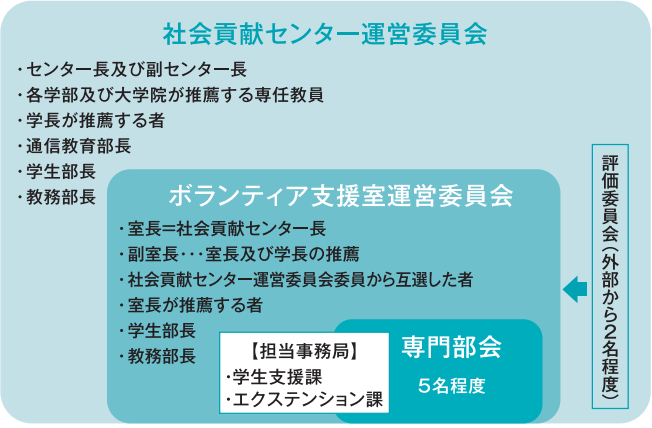
STEP2

設立の準備

東京2020大会への協力要請が契機に

「設立の直接的な契機としては、東京2020大会に向けた学生ボランティアの協力要請があり、今立ち上げないと機を失してしまうと考えました」と森田氏。また「設立に向け、学生部等の学生生活に関係のある部署や就職関係など学内の様々な部署の調整を行いました。予算を伴うため法人にも了解が必要でした」と話します。学内関連部署との調整、各学部への了承、ボランティア支援室の場所の確保と環境整備、スタッフの配置、要項の制定、学生周知のための情報発信の検討、そして支援室開設の承認後、学外機関への支援室の設立の周知など多岐にわたる事項がありました。こうした調整に1年ほどかかり、そして教学、法人組織の承認が得られたのが2月という、4月に開設するには、ギリギリのタイミングとなりました。

森田氏は「支援室を、社会貢献センターの外に置くという考え方もありましたが、センター長や事務スタッフも別に必要になるため、社会貢献センター内に設置し、社会貢献センター長（森田教授）が支援室長を兼務し、職員も社会貢献センターの職員が兼務することで人的体制を確保しました」と話します。社会貢献センターには運営委員会があり、全学の代表で構成され、その下に、支援室の運営委員会が作られました。これにより、教学側からの協力が得られる体制を作ったことで、教学側への学内調整も必要となりました。運営委員会の下に専門部会を設け、そこの教員が専門性を活かして、支援室の方向性等を議論します。「調整には相当の時間と労力を要するもので、それをやりきるだけの価値を見出さないとできないことでしたが、これらを通じて本学にボランティア支援室をどうして開設するのかという意味、目標などを学内外全体に認知してもらい、統一した理解が図られたことは、非常に良かったです」と森田氏は言います。



STEP3

多様な学部・学科の学生の参加へ

東洋大学は、2004年に発生した新潟県中越地震の災害ボランティアとして2005年から教職員・学生を派遣しました。2008年からは前述の学生ボランティアセンターが企画立案し、今でも学生が山古志地区の活性化を促進し、山古志の復興を目的としたボランティア活動を継続しています。

また、2011年（東日本大震災）以降、現在も教員や学生は、東日本大震災等の被災地支援を継続して行っています。しかし、参加した学生の中には、ボランティア活動に参加しただけ、または単なる体験として終わってしまうケースもあります。一方教員にとっても、自分のゼミなどで担当する学生中心の社会貢献活動になってしまい、せっかくの活動が狭い範囲になってしまっているという現状があります。「今後は、情報をオープンにし、様々な社会貢献活動を学生達に幅広く周知することが必要であり、このことによって、多様な学部、学科の学生にも参加してもらいたいと考えています」と森田氏は話します。

支援室をスタートするにあたっては、2つの活動の推進を目指しています。1つ目は、社会貢献活動としての被災地支援です。「これは、既に活動がスタートし、継続していますので、今後内容を精査し更なる活性化が必要です」と森田氏。2つ目は東京2020大会に向けた様々な社会貢献活動の推進です。東洋大学は、スポーツが盛んな大学です。「スポーツを通じての知名度は、かなりありますので、スポーツによる積極的な社会貢献活動の実施も目指します。まずは、学生ボランティアの養成。そして教員が様々な運動部のコーチ、部長

として選手の育成に深く関わっていますので、これらの教員を中心に東京2020大会に向けての社会貢献活動の推進を目指します」と森田氏。

さらに、東洋大学で現在実施している教員による小・中・高等学校、特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック学習支援講座（無料）の派遣事業の更なる充実を図ります。「今後は、これらのプログラムに学生が協力できるような体制も検討したいと考えています」と森田氏は話します。

VOLUNTEER COORDINATOR

■ボランティアコーディネーターの役割と取組

専門性を活かして学生を支援

「コーディネーターの役割は外部のNPO、ボランティア団体とのつなぎ役だと考えています。ボランティア情報自体が外部から集約されることもあるのでそれらについてのアドバイスも求められます」と話すのは、ボランティアコーディネーターの林大介氏。林氏自身、ボランティア支援室ができる前までは社会福祉学科で教員をしていました。それ以前も、NPO団体と関わり合いながら仕事を進めていたこともあって、専門的な知識や経験を活かせる立場にいます。外部からの学生ボランティアの協力要請について、本当に学生にとって有意義な活動となるのかを見分ける目利き役を担っています。「仕事としてはボランティアの総合支援というのがコーディネーターの仕事だと思っています。現在、コーディネーターは私一人ですが、もう一人の院生の方がボランティア支援室の窓口として働いています。常に学生たちがここを訪れた時にアドバイスやサポート出来る体制は整っています」と林氏は話します。また「多くの学生にボランティア活動を通じて、自分が社会に貢献できる存在であることに気付いて成長していってほしいです」と林氏は話します。

森田室長と共に支援室の中心となって活躍するボランティアコーディネーターの林 大介氏（社会学部非常勤講師）。

学生への情報発信

「ガクチカサプリ」

「学生のうちにチカラを入れておきたい」という意味でボランティア情報をまとめたサイトで、学生が教務関係の手続きをする学内クローズドのシステムで情報提供を行っています。ボランティア支援室の立ち上げと同時に準備を行い運用を開始しました。現在、登録情報は400件近く。アクセス数も5万件以上となっています。ここに随時ボランティア情報を掲載しています。ボランティア支援室に集まってくる情報はしっかりスクリーニング。「例えばNPO団体にボランティア情報を入力してもらう際には、アルバイトではないですよとか、テスト期間中は学業優先してくださいといった注意喚起も呼びかけています。学生たちに安心してボランティア活動できるようにする役目も私たちにはあります」と林氏は細かいケアも忘れてはいません。

「ボランティアフォーラム2017」では学内のボランティア系サークル、NPOや社協、学内の関係部署によるブース出展や、ボランティア等で活躍している卒業生を迎えたシンポジウムなど、400名超が来場。

ボランティアカフェ

他の大学で行っている活動を参考に、東洋大学でもボランティアカフェが導入されました。現在、約30あるボランティアサークルから代表を招いて、学生同士でボランティア情報を共有できる場をボランティア支援室で開催しています。これまで隔週のペースで行ってきましたが、今後は月1回ペースで内容を精査して行う予定です。「例えばテーマを決めて、関連するボランティアサークルに参加してもらうなど学生には多くの情報が集約できるように工夫はしていきたいです」と林氏。「少しずつではありますが、学生たちの参加や反響も上がってきているのが嬉しいです」と話します。

これからの取組

「現在行われているボランティア活動において、事前と事後の学習を踏み込んで行えてはいません」と林氏。ただ、教員と繋がりが強い東洋大学の社会貢献活動では授業の一環で地域に出たり社会課題について考えたり、それを解決しようと大学生側で色々なアイデアを出したり、提案したり行動を起こしています。「森田先生の場合児童福祉の専門ですので、子供の貧困、シングルマザーの問題、あるいは被災地の子供の支援について取り組んでおられます。そこに学生を連れていくという流れの中で授業で事前学習や事後の振り返りなどを行っています。国際協力の分野、障害者の分野、他にも環境や開発といった様々な分野で、先生方の持っている知見を学生の社会貢献という場面で役立てていただきたいです」と林氏は考えています。

そういった中で、林氏のネットワークを活かして、11月には事前と事後の学習もしっかり行うボランティア・社会体験スタディツアーを開催。また、より多くの学生にボランティア活動を身近に体験できる場として、「ボランティア体験会2017 WINTER」を12月に開催しました。

昼休みに行ったボランティアカフェ。この日は環境系のサークルでした。

取材者の目

大学の社会貢献を推進する組織を基礎に設立

- 「大学として取組が見えにくい」という課題を克服
- 全学の学生がアクセスする学内専用サイトで情報提供

REPORT

■活動紹介

企業体験

ボランティア・社会体験スタディツアー

まずは学生の興味を引きそうな企業をチョイスしました。企業やNPO団体が行っている社会貢献活動の現場を見学し、意見交換やプログラムを体験することで、違った側面から社会を眺める機会を創造します。それぞれのコースは定員があるものの体験日とは別に事前と事後の学習を日程に取り組み、ただ参加しただけに終わらない気づきや体験をしてもらおうという試みです。

【企業コース】

1. 日本 IBM 株式会社

日本IBMの社会貢献：本業で培ったITの力（データ分析、システム・ソフト開発など）や社員の力（チームビルディング、プロジェクトマネジメント）などを、NPO法人と協働した若年就労支援、小学校・中学校でのプログラミング教室、被災地支援などとして展開。

日本IBM社が、IBMの専門性を活用し、”企業市民”として社会貢献活動に取り組んでいることを、具体的な事例を交じえながら伺い、その後、IBM Client Experience Centerの見学で最先端を担う情報テクノロジー活用についての紹介を受けました。「ICTを用いて社会の問題を解決しているIBM社だからこそのCSRに気づかされた」(4年)、「アルバイト等で耳にすることの多い企業の本社に行けたのが良かった」(3年)など、学生自身の学びにつながりました。

2.LINE 株式会社

LINEのCSR：人と人・人と社会のつながりをもっと豊かにすることを目指し、お客様をはじめとするステークホルダーの皆様とのつながりを大切に、社会的価値創造を進めています。主な活動としては、青少年の健全なネット利用を推進する活動、被災地支援（スタンプ購入が被災地支援につながる）などを実施しています。

参加した学生の学部・学科・学年はバラバラで、ほとんどが初対面の学生同士でしたが、LINE社としてのCSRの取組の説明後、3－4人のグループに分かれて「あなたがLINEの社員だったら、どんなCSRに取り組むか」「自分が考えるIT業界の未来とは」を議論しました。「地方活性化をタイムラインに」(1年)、「歩きスマホの危険性を啓発」(3年)など、大学生としての視点から多彩なアイディアが出ました。ディスカッション後の社内見学では、畳スペースやカフェなどを回り、「こんなところで働きたい！」という声が上がりました。

【福祉施設コース】

3.NPO 法人山友会

ホームレス支援について、山谷地区をNPOの方と一緒に歩きフィールドワークと共に理解を深めます。

最初に、山谷地区の歴史についてボランティアスタッフの方から話を伺い、山友会の取組内容について学びました。その後、2グループに分かれて、住宅地や商店街などのまち歩きへ。「実際にまち歩きをすることで理解が深まった」(2年)、「山谷地域に複数の支援団体があることで、ホームレス状態の方も自分に合う団体を選ぶことができることが分かった」(1年)など、参加するまでは理解できていなかったことを学ぶ機会となりました。

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

■学生ボランティアの意義とは

自分自身の可能性を広げるボランティア

文学部英米文学科 2年
熊谷 麻衣さん

ボランティアは維持することがとても大切だと思います。ただ一度きりではなく継続してこそその地域・団体を支えることができます。またそうすることでコミュニティが生まれ、自分自身の可能性を広げていくこともでき、人との繋がりがボランティアをより向上させると私は考えます。これからはより多くの人にボランティアを経験してもらえるよう周知活動にも努めていきたいなと考えています。

ボランティア活動は学びの場

ライフデザイン学部健康スポーツ学科3年
過外 真帆さん

私にとってボランティア活動は、学びの場であり、自分自身と向き合うきっかけとなっています。活動中の子どもの柔軟な発想や学生からの多様な意見は、自分自身の学びの幅を広げ、自分の中に無意識のうちにある固定概念に気づかせてくれます。また、子どもたちの笑顔や保護者からのお言葉が、達成感となっています。

東洋大学3万人超の学生が成長し、社会の大きな力となっていく日

ボランティア支援室長
社会学部 社会福祉学科教授
森田 明美氏

ボランティア活動は、社会に貢献できる意義深い活動であるというイメージですが、自分で活動をスタートするには、その第一歩の踏み出し方がわからない学生が多いです。また、体験することで、初めて活動の意義を知り、自身の心境の変化に気づくものです。そのため、このはじめの一歩を支援することは、非常に重要なことだと思います。しかし、活動をスタートした後は、学生自身が体験を通じ考え、私共は活動をそっと見守り、応援することが大切になります。支援しすぎると依存的になってしまい、学生の良い経験に繋がらなくなってしまうからです。支援の加減は非常に難しいですが、これらを理解したうえで支援を続ける人と場所の提供が必要です。東洋大学3万人超の学生が自分の意思でボランティア活動をはじめ、成長し社会の大きな力となっていく日を夢見ています。

東洋大学 ボランティア支援室 取材後記

東洋大学ボランティア支援室は、東京2020大会への協力要請をきっかけに、社会貢献センター長（支援室長兼務）のリーダーシップの下、ボトムアップ的に設立準備がスタート。学内調整には多くのエネルギーを要しますが、学生にとっても大学にとっても価値あるものをとの思いのもとでの支援室設立は、やり遂げた関係者の努力の結果といえます。設立1年目でこれからの取組が期待されます。

青山学院大学
ボランティアセンター

大学開校：1949年
学生数19,142人（大学院・専門職大学院含む・2017年5月1日現在）
青山キャンパス・相模原キャンパス

東京都渋谷区渋谷4-4-25　青山キャンパス1号館1階
TEL.03-3409-6154
agu-volunteer@aoyamagakuin.jp
http://volunteer-aoyamagakuin.jp

設立のあゆみ

2011.03	東日本大震災発生後に、被災地に対して緊急支援等を行う目的で、学長を委員長とする緊急支援対策委員会が発足
05	ボランティア企画・活動団体として「青山学院大学ボランティア・ステーション」が設立される
07	被災地各地で、学生・教職員がボランティア活動に参加。その後、アジアでの国際協力やキャンパス近辺での地域協力へ活動を拡大
2015.03	緊急支援対策委員会にて「ボランティアセンター」開設に向けたワーキンググループを設置
11	ワーキンググループが「ボランティア活動支援の方向性」を提案し承認される
2016.04	「AOYAMA VISION」における事業計画として位置付けられ、ボランティアセンターの開設準備を開始する
	ボランティアフォーラムを開催して学生ボランティア団体との意見交換を行い、意見の取りまとめを行う
03〜07	ボランティアセンター設置準備委員会とボランティアセンター設置準備実務委員会による協議
10	ボランティアセンターを設立

ボランティアセンターのミッション

1. 学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
2. 大学の持つ専門性や強みを活用してボランティア活動の社会的効果を向上すること
3. 社会貢献活動への参加にともなう教育的効果を向上させること

年間活動状況

2017. 02	・秋田県仙北市除雪ボランティア ・ネパールクリーンアップキャンペーン＆衛生教育
03	・塩竈　学童保育＆けやき教室 ・熊本　農業 ・陸前高田　地域＆福祉
04	・青学くまもとウィーク ・ボランティアセンター開設記念シンポジウム ・ボランティア合同説明会 ・渋谷区清掃活動
05	・渋谷区「せせらぎ祭り」出展 ・「夏体験ボランティアキャンペーン2017」ガイダンス
06	・全国NGOスタディツアーフェスタ2017・海外ボランティア合同説明会 ・海外ボランティアのための危機管理・安全管理セミナー ・2017年度第1期ボランティア・プロジェクト・サポート制度 ・渋谷区福祉支援
08	・陸前高田　教育＆地域＆コミュニティ活性＆福祉 ・塩竈　学童保育＆けやき教室・コラソン＆サマースクール＆浦戸諸島＆商店調査＆PR動画 ・インドネシア　防災教育＆衛生教育 ・熊本　農業＆教育
09	・岡山県総社市英語特区ボランティア ・同窓祭
10	・2017年度第2期ボランティア・プロジェクト・サポート制度 ・M4R（Meal for Refugees） ・人権問題について考えるワークショップ
11	・青山祭 ・ボランティアセンター1周年記念シンポジウム
12	・渋谷区福祉支援クリスマス会

■ 青山学院大学ボランティアセンターとは

ボランティア活動を通じ、豊かな人間性と独創性を備えたリーダーシップを発揮する人材を育成します。

学生生活部 学生生活課
設立当時:政策・企画部 政策・企画課
中尾 匠吾氏

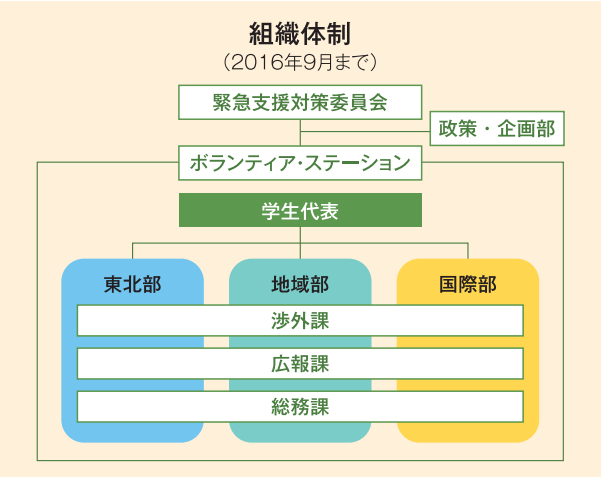
STEP1

設立までの経緯

学長をトップとする被災地支援組織からボランティアセンターへ

東日本大震災後の被災地支援を行う目的で、学長を委員長として立ち上がった「大規模災害被災地緊急支援対策委員会」のもとに、学生・教職員ボランティアを支援する組織「青山学院大学ボランティア・ステーション」が設置されました。2011年より石巻復興プロジェクトとして被害を受けた商店街の路上ブロックの撤去と洗浄などに取り組み、商店街を蘇らせることに大きく貢献しました。「その後、国際協力など活動範囲が拡大し活動が定着して、緊急対策的な性格が薄れ、政策・企画部(当初、学長室)の業務に馴染まなくなり、加えてイニシアチブをとっていた教員が退職を迎えることになりました」と学生生活課の中尾匠吾氏は話します。「また学生の意識調査によるとボランティア活動に興味を持つ学生が多いにもかかわらず、大学としてそれに十分に応えられていませんでした。このような複合的な要素からボランティア・ステーションを次のステップに進めるための検討の場として、2015年にワーキンググループが設けられました」と中尾氏。ワーキンググループではボランティア・ステーションの活動をより実質化させるために、「学内の中間支援組織としての機能」「大学戦略としての機能」「サービス・ラーニングに向けた機能」という3つの方向性を明確化し、これが緊急支援対策委員会によって承認されました。翌年の2016年に青山学院の長期計画「AOYAMA VISION」にサービスラーニング機能が位置づけられ、大学内にボランティアセンター設置準備委員会と実務委員会の2つの委員会が設置され、設置準備がスタートしました。「ボランティア・ステーションの組織体制がもともと緊急時のまま学内執行部の中枢部門にあったために、それがかえって学内調整をスムーズにし、腰を据えた議論を行うことができました」と中尾氏は説明します。

準備委員会の設置後には、新入生歓迎行事とあわせてボランティアフォーラムを開催。以前から活動している学生ボランティア5団体や、その他の様々な学生の声を集めて取りまとめる作業も行いました。フォーラムでは、チラシの配布を認めてほしいとの声や活動場所の確保などが希望として出たほか、他大学との交流や交通費のサポートなど様々な声が上がり、ボランティアセンターの設立にあたっては全てを実現することはできないものの、今後の課題として大いに参考にすることができました。



青山学院大学では東日本大震災の発生後に、学長を委員長とする緊急支援対策委員会が発足し、ボランティア活動を支援するボランティア・ステーションを設置。

STEP2

コーディネーター配置

大学戦略としての役割を担うボランティアコーディネーター

課外活動の一つであるボランティア活動は、多くの人にとってプライオリティも低く、なぜボランティアセンターを設けるのか、という意見も生まれます。中尾氏は「職員も新たに投入することが必要になるので、当然コストがかかりますが、それを超えるだけの戦略性やイメージを持つことも大事です」と話します。単に時代の流れに乗って作るようでは、コスト管理の面からも設置は認められなかったかもしれませんが、ワーキンググループではそういったことをよく議論し、ボランティアセンターの理念を作り上げたことで、学内の大きな異論もなく執行部にもスムーズに認められ、設置の方向性が決まりました。

「学内調整はスムーズに進んだものの、ボランティアセンターに主体的に関わってもらえる担当教員を探すことでは苦労しました。教員の方々に本業以外の部分でコミットしていただくことは大変でしたが、率直な思いを伝え、興味を持っていただいた方に協力いただき、一緒に形づくってきました」と中尾氏は当時を振り返ります。

「設置にあたっては、どのような体制で行っていくのかを他大学から学ぶため、コーディネーターを置く置かないかについても、どのようなメリット、あるいはデメリットがあるのかを主眼にヒアリングを行いました。ボランティアセンターにコストをかけずに学生にボランティアを紹介するだけの機能を持つだけでよいのであれば、割り切って置かないという選択肢もあります。しかし本学のボランティアセンターはワーキンググループでの話合いによって結論付けられたように、将来の大学戦略としての機能を果たすという重要な役割を持つものであり、専門性のあるコーディネーターを置くことが決定されました」と中尾氏。

現在、ボランティアコーディネーターとして活躍している佐藤亜希氏は、2016年10月1日にボランティアセンターが設置された際に採用され、さらに4月には他大学のボランティアセンターに在籍していた澤村隆太氏が採用されました。他の大学のボランティアコーディネーターと違う点としては、大学戦略の一端を担うスタッフとして考えられていることといえます。

ボランティアセンターが設置された場所も、1号館1階で近くにコンビニもあり、学生の目に付きやすい場所に設置されています。「場所の確保はやはり大変でした。最初はあそこの棟の2階があいているよ、なんて言う話もありましたが、学生のための施設という大学のきちんとした考えがあったからこそ学内の理解を得ることができ、この場所に設置することができました」と中尾氏は話します。

佐藤亜希氏は、ボランティアセンター立ち上げと共に青山学院大学へ。

澤村隆太氏は関西の大学でボランティアセンターの立ち上げに関わった後に、青山学院大学へ。

STEP3

活動と成長

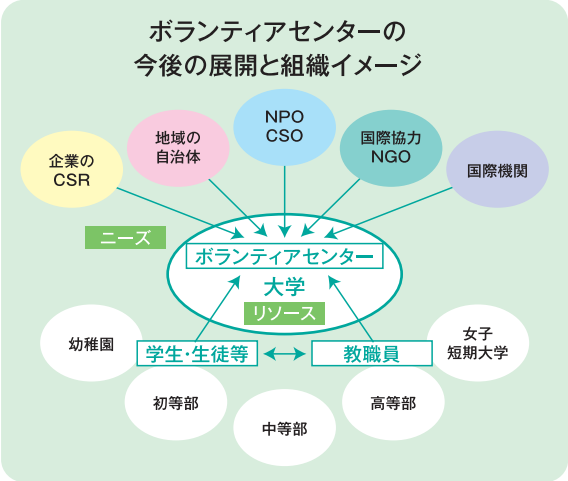
ボランティア潜在層への より積極的なアプローチ

青山学院大学ではボランティアセンターよりも先にボランティア・ステーションが存在し、学生が自主的にボランティア活動に取り組んできた歴史があります。「そのため学生がセンターという存在に慣れていない部分があるかもしれません」と佐藤氏。「学生は自分たちがやってきたことが100だと思っていたのに、ボランティアコーディネーターによってもっと出来るところがあることに気づかされて、コーディネーターとどう関わっていけば良いのか、関係性がまだまだ不十分なため学生たちに戸惑いがあるのだと思います」と澤村氏は話します。

また、澤村氏は「学生へのアンケートでは、6〜7割がボランティアへの関心を持っているという結果が出ているにもかかわらず、実際にボランティア経験がある学生はその中の2割程度。学校生活の一部としてボランティアセンターをどのように利用してもらうのか、ボランティア潜在層に対するアプローチは、より深めていかなければならない部分であり、課題です」と話します。

まだ設置1年のボランティアセンターですが、2018年には相模原キャンパスにもボランティアセンターが開設される予定であり、新入生の入学時期や高校生たちが大学を訪れるオープンキャンパスにあわせて、ボランティアセンターの活動を知ってもらう機会を設けることが予定されています。「ボランティアセンターが気軽に利用できる場所だということを入学時点で知ってもらえれば、そこから発展できるのではないかと思います」と佐藤氏。

「ボランティアセンターを利用しない学生生活が固まってしまうと関心を持ってもらえないので、入学前から存在を周知していくことは重要です。運営がようやく回り始めたばかりですし、課題はまだまだ山積しています。新しく何かやっていくにも、大学の方向性とコーディネーターの考えがずれることなく一致していることが大事です。広い視野を持って学生のために何が必要なのかを探しながら、方向性を見出していけたら」と澤村氏は今後のボランティアセンターの在り方について語ります。



青山学院では「地の塩、世の光」のスクール・モットーのもと、幼稚園から大学まですべての教育機関においてボランティア活動に力を入れている。

取材者の目

前身のボランティア・ステーションの組織的な課題の顕在化が契機に

[ボランティアセンター誕生のポイント]

- **前身組織が臨時的に学長の下でスタート**
- **結果、執行部のリーダーシップが寄与**
- **センターを持つ戦略的な意義が明確化**
- **その意義が長期計画に位置づけられる**

VOLUNTEER PROGRAM

■ボランティア・プロジェクト・サポート制度

ボラサポ

ボランティア活動を 応援するためのサポート制度

青山学院大学ボランティアセンターでは、学生・教職員が主体となって実施するボランティア活動をサポートするために、2017年度より「ボラサポ」というサポート制度をスタートさせました。

ボラサポは青山学院大学の学生または教職員が3人以上集まれば応募することができる制度。「2017年度の事業計画を立てる際に、こういったことをやりたいという意見が出てきたので、今年度は試験的に実施しています」と佐藤氏。使用目的については限定していませんが、学生では遠方に行く際の交通費にあてたいということや、物を使った支援を行う場合には物品費にあてることが多いとのこと。ボラサポは組織を運営するためではなく、あくまで活動に直結するものに補助を出すと定めています。

ボランティアセンターというと学生に対するサポートに目が行きがちですが、ボラサポは、普段、教職員が抱えている社会問題に対する課題や意識についてもサポートしている点が特徴。「例えば、職員が地域での清掃活動に学生を巻き込んでやりたいというような場合に、センターとしてサポートするという例がありました。こういったところは、他大学とは違う部分ではないでしょうか」と澤村氏は話します。

青山学院ならではの 幅の広いサポート

第1期のボラサポでは、応募件数が8件あり、採択は4件となりました。採択プロジェクトは、岩手県大船渡市で開催されている三陸港まつりにおいて、「ペットボトル灯籠」を作成して会場に設置するという、住民の参加機会の創出を目指した被災地支援の一環であるプロジェクトや、青山学院主催のフィリピン訪問プログラムへの参加をきっかけとして自主的なボランティア活動へと発展したもので、孤児院での施設の補修や子どもたちとの文化交流を行う海外支援プロジェクト、さらに体育会のクラブの学生が、合宿地においてお世話になった方々に向け、清掃活動を行うという地域貢献を目的としたプロジェクトに対してのサポートなど、サポート内容の幅は広く、幼稚園から大学までを擁し「地の塩、世の光」をスクール・モットーとする青山学院ならではのものとなっています。

サポート金額は1件につき5万円〜10万円。前期に3件、後期に3件の年間6件程度を目安にサポートが行われます。

フィリピン・マニラ郊外にある孤児院"Samaritans　Place"に再訪問。青山学院のプログラムで2017年2月に訪問したことをきっかけに有志メンバーで企画した。

REPORT

■活動紹介

2017塩竈プロジェクト

サマースクール
塩竈市立第一中学校
2017年8月17日・18日

学習意欲の向上につなげて未来の可能性を広げる

宮城県では、震災発生以降、家計の圧迫やストレス等で学習環境が悪化しています。そのためサマースクールでは、学生たちによる学習補助によって学習意欲の向上につなげることを目的に活動しています。

先生方よりも年齢の近い大学生がコミュニケーションをとることで、大学がないこの地域の子どもたちに、大学とはどのようなものなのかを伝えることで好奇心を刺激し、自分の将来を考えるきっかけになる機会をつくります。

活動では、午前中には生徒たちが持ち込んだ夏休みの宿題や学習塾のテキストの問題について、答えの導き方を一緒に考えます。一緒に考えるときには年齢の近い大学生という立場から、自分の経験を含めた、より生徒たちにあった学習方法をアドバイスするように工夫します。午後は部活動に参加し、一緒に体を動かしながら積極的に生徒たちとの交流をはかり距離を縮めます。

有意義な体験になったという参加者が多かったサマースクール。

活動初日は、学習意欲がわかない生徒たちに、どのようにアドバイスすればよいのか戸惑った学生もいましたが、ミーティングで工夫すべき点を話し合い、2日目には自分の上京経験を話すなど、各自が初日の反省を活かした活動を行うことができました。2日という短期間でしたが、中学生と大学生の両者にとって、価値ある時間を過ごすことができました。

PR動画
塩竈市魚市場・塩竈海産物仲卸市場
2017年8月17日～18日

大学生の目線で塩竈の魅力を発信する

塩竈市の魅力を発信するために、水産物卸売場での PR 動画取材。

マグロやカキ、海藻などの水産業で栄えてきた塩竈市ですが、震災の影響により漁業従事者も大幅に減っています。中でも島は居住者も少なくなり高齢者率も高いという状況にあり、一人の漁師さんがこなす仕事量は、1年を通じて膨大なものがあります。その負担を少しでも減らすことができないかと、こうした漁業者への活動を続けています。農業支援なども経験した参加者から、「漁業支援活動が体力的には一番きつい」という声が聞かれるほど大変なものでした。

浦戸諸島
浦戸諸島
第1陣:2017年8月11日
第2陣:2017年8月15日～18日

労働力不足を補い島の生活環境を向上

浦戸諸島では、以前より若者の島外流出が問題となっていました。中心産業である漁業や農業の後継者不足や、お祭りなどの伝統文化の担い手を本土からのボランティアに頼っている中で、東日本大震災が起こり問題がさらに顕著に表れるようになりました。そのため浦戸諸島での活動は、高齢な方々が行うには体力的に困難な作業を、大学生が代わって行うことで、島の生活環境向上と、人手不足の一時的な解消を目的としています。

活動では島の各所の草刈りや、カキの作業場で不要になったカキ殻の処理の手伝いを行いました。島での活動は、島の方々の要望に応えるだけになりがちなため、活動しただけで終わるのではなく、島がより良くなるための提案ができるようにすることが今後の課題です。

草刈り作業後の記念撮影。作業を通じて人の役に立つという実感を感じる。

VOLUNTEER & SCHOOL LIFE

■学生ボランティアの意義とは

「英語特区ボランティア」に参加して（岡山県総社市）

文学部 英米文学科 3年　山中 映実さん

地域と密接な関係を持つ小規模な学校に興味があり、英語特区ボランティアに強く関心を持ちました。一緒に参加したメンバーや出会った方々、そして子どもたち。活動の全てが私にとって宝物です。与えるより何かをもらう方が大きかった活動であり、総社市はもう私にとっては故郷。次に「帰省」した時には子どもたちに英語を教えられるよう、大学で英語教育の学びを深めていきたいと思います。

生き方が導きとなるサーバント・リーダーへ

青山学院大学 副学長　文学部教授　外岡 尚美氏

進んで人と社会とに仕え、その生き方が導きともなる「サーバント・リーダー」を育成するという理念に基づき、ボランティアセンターは学生の主体的活動を組織的に支援しています。2018年度には青山に加えて相模原キャンパスにもボランティアセンターを開設し、ボランティアセンターの機能を強化して正課としてのサービス・ラーニングも実施します。地域行政、国際協力NGO、ソーシャルビジネス等、多様な視点から社会課題に取り組む経験を積むことで、「当事者」として社会を生き、社会の変革を担うことができる地球公共精神を持ったリーダーを育成します。また教員個人や学生ボランティア等の繋がりを通して全国の地方自治体と連携し地域貢献活動を行っていますが、今後これらの活動を継続的かつより効果的に展開していく組織的取組を行うために、大学教育と社会の接点としてのボランティアセンターの果たす役割はますます大きくなります。

ボランティアセンター長
教育人間科学部
教授
鈴木 眞理氏

青山学院のスクール・モットーは、「地の塩、世の光」です。これは、ボランティアの理念に沿うものですが、ボランティアセンターは、他の大学に比べてきわめて遅い立ち上げです。実際、学生や職員によって社会に貢献する活動が行われて来てはいましたが、大学としてそれを積極的に支援しようということでの設置となりました。他大学の先駆的な試みに学びつつ、学生の人間形成にも繋がる、青学らしいボランティア活動の広がりを支援することを、めざしています。

青山学院大学 ボランティアセンター 取材後記

設立経過には、青山学院大学特有の背景がありますが、他大学同様、学長以下の大学執行部の理解とリーダーシップが、また、それを具現化しようとする関係者の努力が結実したものといえます。
AOYAMA　VISIONでは、ボランティアセンターの機能を強化し、正課としてのサービスラーニングを展開するとされています。サービスラーニングの実施はこれからですが、専任2名のボランティアコーディネーターには、その専門性の発揮が期待されます。